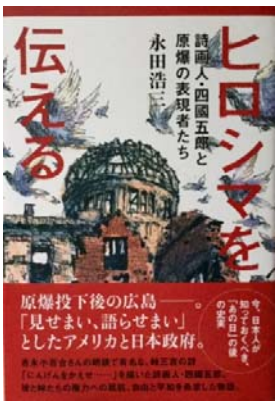
ヒロシマを伝える



表題は永田浩三さんの近著タイトルである。著者の永田さんは、2009 年まで NHK のディレクター・プロデューサーとして「クローズアップ現代」「ETV2001」などを制作してきた。現在は武蔵大学教授として活躍している。

永田さんは「2015 平和を語る 8 月名古屋集会」で「戦後 70 年、メディアは戦争を止められるか」と題して講演した。その講演を聴いたあと、フェイスブックで永田さんとつながった。永田さんの投稿から、本書完成までの苦労も知ることができ、親近感をもって読み進んだ。これほど集中して一気に読んだ本は、最近では珍しい。

本書は副題「詩画人・四國五郎と原爆の表現者たち」のように、弾圧・差別・偏見に屈することなく、「言葉と絵の力」によって、原爆の惨烈さと平和を訴え続けた人々の物語である。多くの番組を制作してきたジャーナリストらしく、きめ細かな本格的な取材にもとづいて構成されている。永田さんならではの、貴重な記録であり、学びの本である。一読を薦めたい。

本書から初めて知ったことも多い。断片的に知っていたことが、一本の線でつながった感じがした。原爆投下後の広島で、「見せまい、語らせまい」としたアメリカと日本政府。峠三吉や原民喜、大田洋子など、「ヒロシマを伝える」多くの表現者たちの苦難に満ちた活動など。そして、本書の中心を占める詩画人・四國五郎について。

第 3 章「シベリアの四國五郎」の次の言葉がこころに残る。ここは表紙カバー裏にも書かれており、著者永田さんの思いも示しているのではないか。―　四國のいつもの口ぐせがあった。「今ここにあることを残すことが大事なんだ。わかっている人間がやらなきゃならない。そういうことを次の世代に引き渡していくことが大事なんだ」

本書を読んで書きたいことは多いが、四國の作品のなかで永田さんがとりわけ大好きという冊子を紹介しておきたい。私も付せんをつけて読んだところでもある。

冊子は、1990 年 1 月 24 日から 3 月 14 日まで広島婦人会館で開かれた『心から心へ絵の教室』と題した、手作りの教科書だ。―　「私たちは、毎日生活の中で、さまざまな手段でコミュニケーションしていますが、時に絵による、または、絵とその他の手段との組み合わせによる、それを実習してみましょう。絵によって、情感を愛を、相手の心へ届ける技術を勉強してみましょう。　　人類が手に入れた言語に次ぐメデアです。形状や色を伝えるのにバツグンのメデアです。絵と言葉(文字)と結合したメデア。芸術としての絵画。絵画美は伝達されることによって、成立するものです。--- 絵画性の高さとは、数百号のタブロウであれ切手代のイラストレーションであれ、いかに作者以外の個人、又はたくさんの人々の心の奥に届くかが物差しとなります。」

(2016 年 9 月 19 日)